
[D]ecided [D]oom's [D]ay - トリア・デルタ -

Dominique

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

[D]e c i d e d [D]o o m ' s [D]a y ートリア・デルター

【Nコード】

N 9 4 9 9 M

【作者名】

D o m i n i q u e

【あらすじ】

　Iは目覚める。空の、虚無の状態で。Iは知る。つながりの、家族の温かさを。Iは誓う。これ以上、もう二度と失わないと。これは、ある存在の物語。辿る先には、ナニが待つのだろうか。

魔法先生ネギま！　の二次小説です。オリ主ものですが、転生ものではありません。原作崩壊の可能性もあります。なに分勝手がわかっておりませんので、そのときはご指摘いただけたら幸いです。ち

なみに、タイトルは『奈須きのこ』さんの某小説とは全く関係ありませんのでご注意ください。ルビの数が多いので、PCを推奨します。処女作、更新不定期&亀更新です。ええ、もうおっそいですorz。さらに、廚二十設定ブレッツブレですorz×2。読んでいただくことが、幸せです。

0話 ~ **H i s t ? r i a n i h i l** ~ 『出発点 — **I n c ? p i t** — 』 (前)

前書

まず、読んでくださっている皆様に感謝を。

正直、この話はのせるかどうか迷ったのですが、いきなり話が飛んでしまうのもあれなので、掲載します。…といっても、この話はネギま！成分ほぼないです。申し訳ありません…

サブタイの分かりにくさは使用です。ぶっちゃけ厨二です…

それでは、どうぞ。

0話 ~ **H i s t ? r i a n i h i l** ~ 『出発点 — **I n c ? p i t** —』

視覚が認識するのは、一色の色？白。

白？黒と対をなす『正』の色。

そのはずなのに、何故だろう。

途方もなく不快感を覚えるのは。

「被験体…20946939。細胞分裂数『0・00』。肉体年齢『18・00』を維持。
精神状態『安定』。呪紋『反応なし』。現段階では、異常、ありません。」

――声が聞こえる。

「不測の事態が起こる可能性も考えられる。十分、留意しておけよ。」

「わかってますよ。」

「ハッ、調子の良いやつだな。」

――ああ、そういうことか…

「しかし、ようやくカタチになってきましたね。
当初は理論だけで現実味はまったくなかったのに。」

「人類のために繋がるといふのであれば、必死にもなるさ。
ましてや自分たちのためなら、なおさら・・・な。」

「それなら、このコも報われるというものです。あんな実験も、
もうないことですし。」

「ふっ、そうかな。」

——
もてあそばれたのか
売られたのか。人のために。

「事を成すには、犠牲は付き物だ。今回は最小限で何よりだったと
考えておけ。」

——じゃあワタシは？^{オレ} 犠牲には何が与えられるんだ？

「なんだ！？ これはいったい・・・」

「どうした？ なにかあったのか？」

「被験体…20946939 から高エネルギー反応！ 肉体が発光しています！！」

「何だと！？」

——イヤだ…

「いや、『呪紋』です！ 『呪紋』が突然、発光を・・・」

「バカな！ あれはまだ起動条件を満たしていないはずだ！！
アンチ・マジック・フアクター
とにかく、魔法抗体を打ち込め！！」

「はい！！」

——
なにも知らず、なにも得られず、

「魔法の発現を確認！ これは・・・コード… ■■■■■—■■■■■！」
超遠距離時空間転移魔法です！！！！」

「そんな魔力^{マナ}はここには・・・まさか！？ 別位相から！！」

「急げ！！ 早く投入しろ！！」

—— 此処いに存ることが彼方たちのためだけだけならば、

「これは・・・！
アンチ・マジック・フアクイスベル
魔法抗体！ 無効化されました！！」

「まずい！ 抗体を作られた！」

—— ワタシオレは自由を求める。

「状態を仮死状態にしろ!! なんとかしても止めるんだ!!」

「やっていますが、信号を受けつけません!!」

—— 見た事のない、

—— 「『色』を求めて。」

「魔法に攻撃性反応が!! 推定規模『半径1マイル』!! 中心地は・・・ココです!!!!」

「っ! 総員に通達!! 各員、最寄りのシェルターに避難せよ!」

「はっ、はい!!」

— それでは・・・

— 「さようなら、皆さん。」

— 「いままでの^{おれい}怨み、」

— 「晴^{おいて}していきますね。」

「な・・・ん、だと・・・・・・・・」

だれもが、^{かれいがい}息を呑んだ。

『彼』が発したことは誰にも理解される事はなく、

——魔法が発動した。

光がすべてをつつむ。

それは、包容する女神のごとく。

それは、破壊する悪魔のごとく。

ある者たちは、自らの屍をさらし、

またある者は、自らのために『旅立った』。

ここより悪逆無道なところはないのだから。
ひととあつかわれない

これは、もはや幻想。

いまや誰も知ることはない。

しかし、物語は開始する。

顛末は誰にもわからない。

だからこそ、人は生きているのだ。

幸せを求めするため。

願いを叶えるため。

だが『彼』の場合はどうなのだろうか？

『幸せ』など感じることはなく、

『願い』を考慮する時間もなく。

そもそも人として生きることすらなかった『彼』が。

だからこそ、『彼』は『旅立った』。

己を見つける、目的を持って。

存在している、理由を探して。

『答え』は『旅立ち』の彼方^{むこう}へ。

0話 ~ **H i s t ? r i a n i h i l** ~ 『出発点 — **I n c ? p i t** — 』 (後)

後書

いかがだったでしょうか？

まさに自己満足の作品でした。申しわけないです…

またコメントや感想、批評などいただけると幸いです。

ただ、見方がまだわからないので、お返事ができるかどうか…
頑張って、マスターします！

それでは、

— **V a l ? !** (お元気で！)

1話 ~ H i s t ? r i a p r ? m a ~ 『日常 — n ? n c — 』（前書き）

前書

いきなりですが、舞台がズバン！と変わります。

舞台は中世ヨーロッパ。

ということは…さっしのいい方ならわかるかと思います。
では、どうぞ。

1話 ~ H i s t o r i a p r e m a ~ 『日常 — n o n c —』

季節は春。

中世欧州ヨーロッパのとある城。

近代では『百年戦争』と呼ばれる動乱が続いていた頃。

まるで、そんなもの百年戦争の影響など感じさせないかのように、

その城は活気に満ちていた。

とはいっても日本の戦国時代のように町が隣接している、つまり城下町になっているわけではない。

この城に関しては、湖うみに浮かんでいるのだ。

現代の人工島に似ているかもしれない。

城の周りには貴族の生活地帯があり、さらに湖うみを挟んで、一般人の住んでいる区域があるという一風変わった城なのだ。

しかし、『外敵』ヨーロッパから身内を守るという意味では、これほど完成度の高い城は中世欧州にはなかったであろう。

周りが湖に囲まれているということは中世ではかなりの優位に立つことができる、

さらに、こちらの区域と一般区域の間には一本の橋しか存在しない。不便といえは間違いではないのだが、安全性の上にあるからこそ、成り立っていることを忘れてもらっては困るというものだ。

そんな平和ボケした場所だから、なのであろうか？

島端の林に倒れていた身元不明の一人の男を、

牢にも入れずに保護した、というのは。

・
—
side;
Begin^始

正直、驚きを隠さずにはいられなかった。

だってそうでしょ！

城^{うち}の近くの林に男の人が倒れてたんだよ！？

しかも、は、は、ハダカで！！

| a
F e w
minutes^{数分前}
ago . . .

「はー、つかれたー・・・」

そう言って私は腰をおろす。

まだ肌寒いある春の日の夕暮れ時。

今は林の中、座り込んで黄昏^{たそが}れていた。

もちろん座る椅子などもなく、服が汚れるのは眼にみえているのだが、そんなことは気にならない。っていうか気にしない。

「今日も礼儀作法講義のオンパレードだったなあ・・・」

そう。さっきまでそんなことをやらされていたのよ。

今は息抜きとして近くの林に来てるとこなんだけど。

貴族の元に生まれたとはいえ、こんなこと、息抜きかねなきややってられないって！

「ふふっ、お疲れだね。ビリスローラ」

まあ、一人ではないのだけれど。

「当たり前よ！　ほとんど毎日毎日、何回も同じことをネチネチネチネチと・・・。」

あと、いつも言ってるでしょ！　その呼び方で呼ぶの止めてって
「！」

言い忘れていたが、私の名前はピリスローラ・T・J・マクダウエル。
ティンカジュディ

れっきとした貴族。しかもこの辺りの領主の一人娘である。

ちなみに、私の隣で（私がいえたものではないが）服が汚れるにもかかわらず、私につき合ってくれるのは、ノーレッジ・マクダウエル。いちおう、夫ということになっている。

彼もまた私と同じ貴族で、もともとノーレッジ・ウェスタリアという名前だったが、結婚してからマクダウエルの性を名乗っている。

ノールとは昔からの腐れ縁、所謂、幼馴染いわゆるおさなじみというやつだ。

わたしが12歳、ノールが13歳のときに今の時代では珍しくない政略結婚で妻と夫になった。

といっても昔から知っていたし、その・・・そ、そそそんなに嫌いじゃないし、どこぞの馬の骨と結婚させられるより、よっぽど、いい・・・んじゃないかな？。

今の生活には満足している。

不満なのは、さっきの講義もそうだけど、両親と会うたび会うたび、孫の顔が見たいって言うてるのよ！

そりゃあ、私だってほしいけどさ。その、だから、えっと・・・ノール、との・・・

な・・・なななんでこんな、こっ恥ばずかしいこと言わなきゃいけないのよ！

っていうか、そもそも私は誰に喋はなってるの！？

「いいじゃないか、呼んでも減るもんじゃないし。」

「減るわよ！　それはもうゴツソリと！」

「なにが？」

「それは、だから、んゝ・・・、乙女らしさ？」

ちなみに補足として付け加えると、私はまだ14歳。

れっきとした乙女ですから！　そこんとこ誤解無きように！

「ふふっ、僕に聞かれても困るんだけど。」

「うー・・・」

『ビリスローラ』ってなんか男っぽいだよ。愛称だって『ベリー』だし。

だから嫌だっていってるのに・・・ノールのバカ！！

・ビリスローラ B l i s s r o l a s i d e ; E n d .終

・Knowledge side; Begin^始.

「うーっ……」

目の前のむくれながら、涙を目頭にためるビリスローラ、改めジュ
ディ。

「ああもうかわいーなー！ ジュディは！」

そんなの……抱きしめないわけにはいかないじゃん！

「きゃっ！ ち、ちよつと！ いきなり何を……」

「何って、可愛かったからつい。」

「なっ、なによそれ……」

よし、陥落寸前まで追い込んだ！ あとは……

「だめだった？」

彼女の耳元で囁いてみる。当然次のことばは、

「べ、別に。嫌じゃないけど・・・」

ツンデレ、キターーーーーー！！ やっぱりジュデいいじりはやめられない！！

僕ってもしかしたら、若干^{サディズム}Sっ気があるのかな♪

「ごめん、ごめん。ジュデイ。意地悪なこと言っちゃって。」

抱きしめながら、一応、謝罪のことばをかけてみる。

「いいわよ。気にしてないから（むしろ、う・・・嬉しかったっていうのは、言わない方がいいよね??????）。」

「そうなの？　じゃあビリスロー」ピキッ！　「そういう意味じゃない！！！」

ドガッツツ！！！！

「グゲッ！」

ーピンポーンパーンポーン？

※ただいま只今、引き潰された様なカエルの音が聞こえましたが、ノーレッツジ（15歳）の調子に乗りすぎたが故のまつろ声でございます。
お食事中の皆様、たいへん失礼致しました。

ーピンポーンパーンポーン？

こ、渾^{こん}．．．身^{しん}の、右．．．スト、レートが、み、鳩^{みぞ}尾^{おち}．．．に。

「ちよっ、ちよっ．．．と、ジュデ．．．。今の」

「ええ。殺^とりに逝^いったわ。」

じゅでいサーン！！ ジガチガウヨ！！？ ジガ！！？

「さあーて、もう逝いつとく？ ノール？」

うわああ……、すごい笑顔ー&すごい苦く賂ろ褻さ♪

こんな、モンスターステキなジュディ、視たことない。いや、視たくもない。

こうなったら、一か八いちかぱち——

「ジュ、ジュディ、ぼくの……こと、嫌い？」

これなら・・・

「そんなことないわ。大好きよ、」

よしっ!! これで・・・

「顔面にストレートラッシュをかけたくなるぐらい大好きよ（・・・ニコリ・・・）。」

何か、別のフラグが・・

！
・
・
・あれ？

「じゃ、
・ ・ ・ 逝^いかせてあげる♪!!」

「ちょ——」

―業務連絡、業務連絡。

※いじめ。かつこわるいね？ by 気絶進行形者、っていうかノールです。

ツンデレは用法用量ようほうようりょうを守って正しく御使ください。

・Knowledge side; End.終

・the Third person's view point;
Begin.

「まったくもー、ノールはそうやってすぐに調子に乗る！」

「愛情表現だって、極普通の。」

「これが普通だったら、世の中どうかしてるわよ……」

結局、先ほどの騒動ならぬ殺人未遂はジュディの慈悲？で収束に至った。

何があったのかは、押して知るべからず。

「でも、息抜きできたでしょ？」

「息抜きっていうのかしら、これ。」

逆になんか疲れた……と内心思うビリスローラである。

「じゃあ、久しぶりに湖^{うみ}沿いまで行く？」

「・・・そうね。たまには近^{ちか}くから見るのもいいかも。」

林とはいえ、ここの木々は比較的大きな木がうつそうと茂っている。

そのため、ようやく林を抜けた先に湖^{うみ}が姿を見せるのだ。

ちなみに城から湖^{うみ}は見渡せるので、『近くから』とはそういうわけだったりする。

「そうと決まれば善は急げ！ 早速行こう！」

「ちよ、そんなに急がなくても湖^{うみ}は逃げないわよ。」

「今が一番綺麗なんだって！ 夕暮れ時の今が。」

そう言ってノーレッジはジュディの手を引いて林を駆けていく。

心^{こころ}做^ししかジュディの顔がほんのり紅く染まっていたのは、夕暮れのため^{ため}の所^{ため}為か。それとも繋^{ノーレッジ}いでいる手の所^{ため}為か。

End. the Third person's viewpoint;

——それとも目の前の、裸で倒れている男性の所為か。

— Come back at time…
時は 戻り

・ Blissrola side; Re.
ピリスローラ 再

開いた口が塞がらない。

『キャアアアー!!!』とか『イヤアアアー!!!』とか言うべき、
いや、普通は言うんだろうけれど。

間違いなくいえることは、顔が確実に赤くなっていることぐらいだ。

「——イ、——え——イ」

ここは島の端っこで、周りは湖で、侵入は無理で、
うみ

じゃああれだ！ 飛んでここに……くるわけないじゃん。

「オ——イ、ジ——イ——！」

っていうことは、流れ流されたってこと？

・・・そうね、それが一番現実的ね。

うん、決定。あの人は流されてきたってことで・・・

——ゴツン——！！

イツ——！！

「イツツツツタア————イ——！！！」

頭、頭があ・・・割れるう・・・

「ふう、やっと戻ってきたね、ジュディ。」

「な、なにすんのよ!!」

今のノール!? 女の子にしていることじゃないわよ!!?

「心外だね。突然ボーっとしたかと思えば、ブツブツと独り言を言い出して。」

とうとうおかしくなったのかと思ったから、とりあえず一発拳骨げんこつを落としてみただけじゃないか。」

「仮にも妻なのよ!? それにボーっとした原因だってその男の人が・・・」

言いかけて、やっと気づいた。

すぐにノールの背中に身を隠すように廻る私。

もしかして、私、天然なの?

「? 何してんの?」

「しょうがないじゃない! そこにハ、ハダカの男の人が倒れてる

んだから・・・」

「？ だから何？」

「眼のやり場に困ってんの！！ それぐらい察しろ！！ っっていうか、早く介抱してあげてよ。」

「そんなこと、とっくに終わってるよ？」

「うそ！？ いつの間に！？」

「君が別世界に旅立ってる間に。」

恐る恐る、ノールの背中から顔を出して、覗いてみると、確かに体にはノールのスーツの上着が羽織ってあった。

「介抱っていつでも、見たところ怪我はなかったから、」

服を羽織っているのを確認して、ノールの背中から完全に出て、よく見てみる。

そこには、金髪の男の人が俯^{うつむ}けで倒れていた。

見たところ、わたしたちよりも年上の人だと思う。

なんてことを考えてたら、突然、

「とりあえず、見捨てるわけにもいかないから、お城に連れて行くけどいいよね？」

とか言い出した。

「ち、ちよつと、そんないきなり・・・」

「ジュディは見捨てるの？」

「そんなことは言っていないでしょ！」

「じゃあいいでしょ？ ほら、ジュディも手伝って。」

まったく、ノールは人がいいのか悪いのかわかんないよ・・・

まあ、臨機応変そつじょうなところも魅力の一つなんだろうけど。

って、女の子に肉体労働させるの！？

「さすがに年上？の男の人を一人で運べるほど、体力に自信はない

よ。
」

さっきの拳骨^{げんこつ}、結構痛かったんだけど・・・

ってことらしいので、仲良く一緒に運びましたとき。

あれ？ 結局わたし、息抜きできてないんじゃ・・・

・B
l
i
s
s
r
o
l
a
s
i
d
e
;
E^終
n
d
.

・Knowledge side; Re^再.

最初に見たときは、不覚にも驚いてしまった。

まあ、人が倒れているところを見慣れているなんて、15歳の僕に要求しても無理な話だしね。

・・・なんかジュディが別世界^{もうそつ}に旅立ってるけど今はほっておこう。

とりあえず、裸ってのは衛生上悪いし、一旦僕のコートをその人に着せる。

どうもおかしい。

この人は今ここに居る、それは間違いない。

感触だってあるし、僕の目は正常のはずだ。

一応、ここの地形を説明しておくと、

今、僕たちが居る場所は林の中。

言うまでもないが、多少なりとも地面の泥濘ぬかるみはある。

まわりは湖うみ。水平線まで見えるものは淡い水のみ。

一般区域は橋の架かった向こう側だから、今の場所と正反対側。

結論から言うと、この場所はかなり孤立している。

なのに何故、この人はこんなにもきれいなのだろうか。

・・・なんか言い方に語弊があるような気がしたので念のため言っておくが、僕にそっちの気は全くない。

今も昔もジュデ^{ひとすじ}ー筋！

.....

閑話休題。

話がずれたので、元に戻ることにする。

要するに、汚れが全くといっていいほどない。

さすがに、俯^{うつむ}けに倒れていたので、腹や胸には多少の泥が付着してはいるが。

泳いできた、もしくは流されてきたとすれば、水が付着しているはずだし、

橋を渡ってきたならば、足の裏が汚れるはずだ。

それらが全くないというのは、いったいどういうことだろうか？

今は答えが出ないので、保留しておこう。

目を覚ましたら、問いつめることにするか。

もし、ジューデイあのこに害をなす存在だったら・・・容赦はしない。

さて、考察も一段落ち着いたし、そろそろジューデイをこっちなぐの世界
に戻すかな。

え？ さっきの 殺人未遂ひとりリンチ、気にしてるのかって？

まさか、そんなことあるわけじゃない♪

フッフ。ゼーんぜん気にしてないよ。

・ Knowledge side; End.終

・Bピリスローラlissrola side;
Re再々::Re.

今、私は客間に居ます。

え、なんか言葉が堅い？

そりゃ堅くもなるって、

「ねえ、ノール。」

いつもよりも小さい声で話す。

そうせざるをえない状況なんだから・・・

「なんだい、ジュデイ？」

「なんで・・・部屋に兵士さんがいるの？」

武器を持った兵士が二人もいたら、堅くならない方がおかしいと思うのだけれど？

「ああ、それね。建前だよ、建前。」

「建前？」

「建前っていうのは原則として建てている方針のことで、他にも行商人たちが・・・」

「説明を聞いてるんじゃないくて！」

はっ、つい大きな声を出してしまった・・・

うう、なんか兵士さんににらまれてる気がする。

「まったく、ジュディはせっかちさんなんだから。」

「誰の所為よ、誰の・・・」

「それで、建前^{たてまえ}だったね。

一応、初見^{しよけん}さんがお客さんとして来たっていう体裁^{ていさい}になってるから、警戒と圧力の意味合いを込めて付いてもらってるんだよ。

まさか、『この人はさっき拾って来た人です。』なんて言えないしね。」

「もしお客様でも、警戒とか圧力かけるんだ・・・」

「まあ、そういうことにしといて」「冗談だったの!？」「声大きいよ?」「うー、」

また、にらまれてるう・・・

「さすがにこのままにはいかないでしょ、この人のこと。」

そういつてノールは金髪の男の方を向いた。

そう、先ほど裏の林の中で見つけた、正体不明の男の人だ。

「そうね、いつまでも保留ってわけにもいかないわね。」

あれから城に戻った私たちは、なんとか父様と母様を説得した。

え？　なんで見知らぬ人を城に入れる許可を貰えたのかって？

あー、それはねえ・・・うちの両親って基本的になんでも二つ返事な人なのよ。

良くいえばおおらか、悪くいえば騙^{だま}されやすいつてところかな。

そんなんでよく領主とその妻やってるわね、って何回思ったことか。

まあ、それに関してはできる部下がいるそうだし、ノールも将来の勉強のために、さらにノールの弟さん、つまり私の叔父^{おじ}さんも手伝ってくれているみたい。

それで、どこに落ち着かせようと悩んでいたら、ノールが

「自分たちの部屋はまずいし、とりあえず客間が開いてるみたいだよ。」

といって、少々強引めに客間に連れて行って長椅子（現在でいうソファー）に寝かせて今に至るというわけ。

ちょっとノールがいつもより強引ってところがひっかかったけれど。

しかし、改めて見てみるとすごい美男子よね。

身長だって高いし・・・6ftフイートは優ゆうにあるんじゃないかしら。

ただ、一つ気になるのは・・・

——額に描かれた変な黒い模様よね。

なんだろう、これ。

まるで、二匹の蛇が大きな木を包んでいる様な・・・そんな気がする。

・・・まあ、あくまで気のせいだけど。

・ビリスローラ
B l i s s r o l a s i d e ;
E 終 n d .

・
—
s i d e ;
B e 始 g i n .

—ここは・・・どこ？

—まったくだ・・・

「ねえ、ノール。この人どうする？」

—こえがきこえる・・・

「んー。お父上、お母上がいいんだったら、ここにいてもらってもいいと思うんだけど・・・」

—だれだろう・・・

—やさしそうなこえ。

「父様と母様は、絶対良いって言うよ？」

「だよね。しょうがない、イーヴィスとプロムくんに身辺調査してもらおうか。

何かと、事情がありそうな人だしね。

幸い、空き部屋なんて腐るほどあるし。」

「そうよね。それが一番無難っていう感じね。」

—知らない、けど、しってる。

「あ、ノール。この人、目、覚ましそう。」

「^{ほんと}本当だ。これは身辺調査なしで済みそうだね。
念のため、ちよっと下がってようか、ジュディ。」

—もしかして。

「ん…うう、」

—このひとは。

「あ、あのー、ごきげんよう？」

—あのおんなのひとは、ぼくの、

「・・・おかあさん？」

「・・・？」

—あのおとこのひとは、ぼくの、

「・・・おとうちゃん？」

「・・・ん？」

「ぼくの、おかあさん、と、おとうさん。」

「.....は？」

—おはよう。おかあさん、おとうさん。

—
side;
End^終.

| A b o u t f i f t e e n ^{約15}
y e a r s ^{年後} l a t e r . . .

タツ、タツ、タツ、

「ハッ、ハッ、」

城の中を駆けていく足音。

規則正しい息づかい。

タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、

「ハッ、ハッ、ハッ、」

軽快な足音を奏かなでいるのは、純白を形容けいようしているかのような小さな少女。

大好きなあの人に近づくために。

・
— side;
Begin^始.

今日はあの人^が帰^ってくる！

だから今日は、

いつもより早起した。

いつもより鏡の前にいる時間が長かった。

いつもより早く朝のお祈りを済ませた。

ここしばらくは顔も見れなかったから、早く会いたい。

会って、ギュッとしてほしい！

——自然と足も速くなる。

あ．．．

見つけた！

——エントランスホール
大広間のその前にさき——

私の、

——あいたいひと金髪の青年がそこに居る。

私だけの、

「おかえりなさい！
リベラルお兄様あ！！」

「ただいま、キティ。」

私だけのお兄様！！

• E^エv^ヴa^ァn^ンg^ンe^エl^リi^ンn^ンe
s.
i.
d.
e.
;.
E^終n
d.
.

1話 ~ H i s t ? r i a p r ? m a ~ 『日常 — n ? n c — 』（後書き）

後書

まず、読んでいただいた皆様に感謝を。

：わかりにくくてすいません。

話の時勢がばらばらなのは、仕様だと思ってください。

この後の書きためは一切ないので、更新は遅れるかと思えます。

ご了承ください。

ご意見、ご感想もお待ちしております。

それでは、

— V a l ? ! （お元気で！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9499m/>

[D]ecided [D]oom's [D]ay - トリア・デルタ -

2011年11月13日14時58分発行